連載

あのシーン、あのセリフ、あの仕草、
忘れられないことばかり。

さあ、映画の話をしよう。

金丸弘美
フリーエディター

悩みは誰に打ち明ける？

映画『アナライズ・ミー』より

最近、いちばん笑ってリラックスできたのが、ロバート・デ・ニーロとビリー・クリスタルが主演をした『アナライズ・ミー』（一九九九）だ。アナライズとは、「分析する」という意味だから、題は「私を分析して」だ。

デ・ニーロはマフィアのボス。突然息苦しくなり不調を訴え始める。

病院で検査を受けるのだが、「異常なし」と言われ、「おめえはヤブ医者だ！」ときめつけ、部下にブン殴らせる出だしからしておかしい。それをボスも部下も当たり前と思っているところがあり、自分の言い分を力で押し通す。なんという横暴さ。

なんでも押し通すというのがボスという沽券にかかわっていて、それを誇示し面子を保とうとするゆえに実はストレスの原因になっているのだ。横綱が絶対負けられない地位にあって、負けが込むと大騒ぎになるのと似ている。しかし、この子供っぽさが、愛らしくも見えるし、だれでも思わず共感してしまうところかもしれない。

それで、ボスは「医者を探してこい」となる。しかし、他の組織の者に病気と知れれば弱いボスだと思われ存続に影響があるというわけで、名医で秘密を漏らさない医者探しとなる。そこで部下から白羽の矢を立てられたのがクリスタルというわけ。

クリスタルは、車で渋滞に巻き込まれて、前の車に追突し、それがなんとデ・ニーロの部下だったのだ。部下とデ・ニーロ本人がクリスタルのもとにやってくる。

ここも笑わせる。おどおどするクリスタルは、「椅子に座れ」とデ・ニーロに命令され、思わず、おとなしく座ってしまうのだ。

こうして否応なくクリスタルは、主治医にされてしまうのだ。

クリスタルは婚約中なのだが、恋人とのホテルだろうが、結婚パーティーだろうがお構いなしに、診療に呼び出されるのである。クリスタルがノイローゼになりそうで、診療時間と予約の話をしても、デ・ニーロは、まったく耳に入らない。クリスタルが激怒するとデ・ニーロはオイオイと泣き、駄々をこねる。

お互いが普通と思っていることが、ぜんぜん噛み合わない。二人の行き違いとズレが最高におかしい。

それでもクリスタルは、デ・ニーロの心の奥底にある悩みの種を引き出すのに成功するのである。

主人公の二人はのびのびと演じていて、むしろ楽しそう。見る限りはストレスはなさそうだ。

精神科医が登場する映画は『普通の人々』（一九八〇）を始めたくさんある。最近では、精神科医を主役にしたロビン・ウィリアムスの自殺未遂で精神病院に入った男が、患者たちに癒され精神科医になることを決心し、笑いの心理療法を生み出す実話の『パッチ・アダムス』（一九九八）。それと、アウトローの天才的知能を持つ数学の達人だが、人とのコミュニケーションのとれない若者と、妻を亡くし失意の中にある心理学者の交流を描いた、『グッド・ウィル・ハンティング』（一九九七）。この二作は傑作であった。この二作品が、人の心の痛みに真摯に対応するヒューマン作であったのに対し、『アナライズ・ミー』は、まさに『パッチ・アダムス』の笑いの心理療法そのままに、大いに笑わせて、気分をすっきりさせてくれるのである。『アナライズ・ミー』の魅せられる理由は面白いだけでなく、デ・ニーロのように結局自分の面子を貫き、一方クリスタルが患者の信頼にとことん応えてしまうというところだ。実際はこれほど円滑にコミュニケーションがはかれて、ストレスが解消されることは少ないに違いない。

それにしても、こんな映画が当たるのはストレスを抱えている人が現実に多いのだろうし、アメリカの精神科医が日常に違和感なく存在し受け入れられているということだろう。

日本だと精神科医の存在は薄い。実際、精神科医療をしている先生に聞くと、日本人は密かに診療に来る人が多く、心理療法と精神病を混同している人が少なくないのだとか。で、日本の場合、リラクゼーションを担っているのは、案外、気軽に行ける、占いや美容室やマッサージだったりするのじゃないかな。

原題：Analyze this／監督：ハロルド・ライミス／出演：ロバート・デ・ニーロ、ビリー・クリスタル、リサ・クードロー／'99年米作品／104分
解説：パニック症候群に悩むマフィアのボスと、地味な精神分析医。まったく対照的な2人がセラピーを通して織りなすおかしな食い違い。
●11月6日より、東京・銀座の丸の内ルーブル他、全国松竹・東急系にて公開予定。

かなまるひろみ●フリーエディター。九州の食べ物を紹介した近刊『食材宝庫九州』（西日本新聞社）が好評。執筆依頼に加えて食べ物に関する講演依頼も増え、多くの人の前で喋る機会が広がり始める。